

第4回 養父市教育（施設）のあり方検討委員会 会議録

日 時 令和7年10月24日（金）午後7時00分～
場 所 養父公民館2階 A研修室

1 開 会

午後7時、高木課長により開会。

出席者の氏名

委 員 小西 哲也委員長、中島 邦子副委員長、村崎 富美子委員、
安東 博之委員、西山 佳代子委員、宿南 宏行委員、
田邊 賢吉委員、久保田 史哉委員、田中 政博委員、
世登 創太郎委員、岸本 純委員、中野 宗一郎委員、
原 真理委員

事 務 局 小井塚理事兼教育部長、柳川まち整備部長、
才木市民生活部次長兼やぶぐらし・地方創生課長、
西山教育部次長兼こども学び課長、
小野山経営政策・国家戦略特区課長、高木教育課長、
中尾学校教育担当課長、森崎100年のまなび共創課長、
小林土地利用未来課兼教育課副課長、中西教育課主幹、
日下部こども学び課主査、圓山教育課主査、白山教育課主事

傍 聴 者 5名

2 委員長あいさつ

小西委員長…こんばんは。今日は、第4回目の委員会です。残り少なくなってきましたが、まだまだ話し合いは半ばだと思っています。前回の終わりに皆様へ宿題を出した形になりました。今日も皆様に話し合いをしていただきますが、よろしく願いいたします。

3 議 事

(1) 報告事項

- ・第3回委員会会議録の確認について

(2) 意見交換

小西委員長…「統合した時に地域に何かおこるのか、何ができるのか」だけに限らずそれぞれの地域が持つ強み・弱みについても話し合いの場に出してほしい。そこから話が盛り上がっていくかもしれないので、遠慮せず何でも発言していただく方向でお願いしたい。夢みたいなことだとしてもいい。話し合いが盛り上がってくれば、前向きな話にもなってくるのではないかと期待している。

米田教育長…前回はどのグループからも「まちづくりのビジョンを明確にしたうえで統合をするべきだ」という意見が出たと聞いている。小西先生も、まちづくりのビジョンを明確にしていくことが大切であり、「教育はまちづくりの一環である」とまとめられていた。「市民を納得させられるまちづくりのプランを作るべきであり、統合すると地域と連携した学びができなくなるがどうすべきなのかということ、是非考えていただきたい」と小西先生から説明された。統合計画を考えるとすることは、そこに向かって何ができるかを考えることであり、それがあり方検討委員会の大きな仕事のひとつだと考える。どうすればこの養父市で、子どもたちが笑顔で学べる教育ができるのかということ、学校が地域からなくなってしまったときに何が起るのかをイメージしながら、そこに向けて何を準備していかなければいけないかを十分に話し合っていたきたい。

【グループワーク】

- ・「学校を統合した地域」何がおこるのか、何ができるのか
- ・養父市学校・園のあり方に係る答申について

【発表①：「学校を統合した地域」に何がおこるのか、何ができるのか】

(1班)

閉校した地域と学校について

- ・閉校した学校を活用して地域の学びの場にできる
- ・子どもたちが大人のなかに入っていける仕組みになればいい

- ・企業誘致でなく人が集まる活用をしたい
- ・教育、福祉、職場に限定しない複合的な施設や考えの方が発展していくだろう
- ・今あるものより新しいものを作り出していきたい
- ・大人になって帰って来ようと思えるような場所になればいい
- ・地元のためのものにするのか、観光の場所にするのかで視点が変わってくる
- ・閉校した地域に住む大人の暮らしは変わらないだろうが、子どもの声が聞こえなくなるのは寂しさを感じてしまう
- ・地域の大人とのかかわり方を知らない子どもが大人になった時に、地域に帰ってきたいとは思わないだろう
- ・廃校となった地域に人集めて交流することが大切

(2班)

- ・学校と地域の繋がりをどうしていくかを考える
- ・すでに統合をしてきた地域を見れば、閉校した学校がどうなるかはおのずと見えてくる
- ・市のビジョンが明確化されて、効率化されていくのではないか
- ・学校と地域がお互いに語りかける相互の連携を生む
- ・関宮学園は統合して広範囲になっても地域とのつながりは継続されている
- ・宿南小学校では、地域の方が学校に働きかけて色々な活動をしてきている
- ・各学校と地域での取組が統合後に継続できるかが課題である
- ・学校の統合によって関心が薄れてしまうのではないかと心配
- ・つながりを維持するために自治協を窓口とする
- ・学校が地域を負担なく受け入れられるための研修会をすればいいだろう
- ・自治協議会を活用した多世代交流やふるさと教育を行う
- ・それぞれの地域の教材で学ぶことは大切だから継続して行ってほしい
- ・統合によって広く多様なふるさとを知る機会になる
- ・ふるさと教育によって愛着を育てることができる
- ・幼少中高を通じたふるさと教育を行うことで郷土愛を醸成しているのではないか

(3班)

- ・資料では令和14年度までの記載しかないが、この後の令和20年・30年はどうしていくのか。その将来から逆算したときに何ができるのか、何が

必要なのか。もっと広い範囲の話し合いが必要ではないか。

- ・地域のための子どもたちではなく、子どもたちのための地域であることを第一に考えたい
- ・「地域が子どもにいないと」と大人の視点で考えている意見が多くなっているが、子どもたちに何かできないかという風に視点を変える
- ・地域の方が統廃合に対しネガティブなイメージを持っているかもしれないが、逆の発想をしていけたらいい
- ・統廃合後、地域の方が新たなチャレンジを生むきっかけになればいい
- ・地域の方が学校でどれほど活躍して下さったのかお礼の会のようなことを開催すれば今後の関係性を強くできる
- ・統合を一つの区切りとしてポジティブに捉え、エネルギーとして新たな循環を生んでいく
- ・少ないほうが吸収されるのではなく、地域の文化を継承しつつ、新たな組織のスタートにすればいい

【まとめ①】

小西委員長 …とても難しい議題だっただろう。要は人が集まる地域といなくなる地域があって、いなくなる地域をどう繋げていくのかという話も出ていた。人が繋がっていくことがまちづくりであり、このことを養父市全体で共有しないとイケない。市役所の中には色々な課があるなかで、例えば地方創生課ではまさしくまちづくりに関する様々な業務をされていると思うが、子どもに関することとなると学校に任されているのではないだろうか。人口減少が激しい地域ほど、人々を繋げていかなければいけない。学校を中心に地域が元気になるのは間違いない。この元気を子どもたちが受け取れば感謝が生まれ、成人したら養父市に戻ってこようと思えるのではないだろうか。では、子どものために何ができるのか。20、30年後はどうするのかという意見もあった。今はいない将来の子どもに何を残すのか。もう一度、「どのようにまちの循環を生んでいくのか」「どう繋がっていくか」「学校中心にどう元気を作り出していくのか」について話し合ってほしい。

【発表②：学校を中心にどう元気を作り出していくのか】

(1班)

- ・将来養父市に帰りたいたいと思っても働き口が少ない現状だがそこに住む

人々が生き生きとし活気あふれていることが大事。働き口があっても住んでいる人が元気がないまちか、市内に働き口が少なくても住んでいる人が元気だなと感じられるまちなら、後者の方が魅力を感じる。

- ・地域の交流の中に外部の人を受け入れにくいことがあるかもしれないが、そのような壁も打ち破れるようにしたい。
- ・子ども同士の交流は学校でできても、大人同士の新しい交流を生み出すことは難しく、きっかけづくりが必要。

(2班)

- ・学校中心に地域が元気になる仕掛けは、学校にも地域にもある共通の行事。共有し一緒に取り組んでいくことが必要。
- ・クラブ活動でものづくりや農業体験をするなど、地域の力を借りることでつながりを持っていく。
- ・統合するからこそ、より広い地域へ子どもたちが出ていくことができる。
- ・より広く養父市をふるさととして子どもたちが捉えることができる。
- ・統合に対する感じ方は子どもたちによって様々。
- ・ほかの地域の子どもの活動することで、子どもたち自身が元気になっている様子が見られる。

(3班)

- ・廃校になる学校で拠点づくりをする。地域を繋ぐ路線バスの待機拠点として使い、カフェを併設しつつ、地域の方や子どもたちが作ったものの常設展示をすることで、全年代の人が繋がる機能を持つ場所にする。
- ・養父市出身で県外に住む人が長期帰省をした際に、夏季・冬季など季節限定の里山留学ができる場所にする。
- ・生徒会や児童会の組織を各学校の代表として、PTA や地域代表も一緒に集まり「学校のあり方」に対する意見を聞くことは今すぐできること。

【まとめ】

小西委員長…私の無理なお願いで、皆さん苦しまれたと思う。統合を考えることは苦しいことである。学校というものが何なのか、ここにいる皆さんが共通の理解をできていないまま話し合いが進んでいると感じた。

1957年に東井義雄先生が出版した「村を育てる学力」には、「進路指導によって確かに子どもの学力は伸びるだろう。農村人口の都市部への移行も必然的になる動向だろう。しか

し、村の子どもが村に見切りをつけて都市の空に希望を抱いて学ぶというのはあまりにも惨めすぎると思うのだ。そういう学校も学習も成り立つだろうが、それによって育てられる学力は、出発点として村を捨てる学力になっていないか」とある。続けて、「しかし、地域を愛することをちゃんと教えていってれば、生活を立てていく大人になってから地域のために頑張れる力を身につけていくことができる」としている。この時代というのは、インターネットはなく、学ぶためには東京に行くしかない時代だった。ぜひこの本を読んでいただけたらと思う。

教育には、学校教育・家庭教育・社会教育がある。とにかく社会教育をつなげるようにと昔から言われてきていたけれども、それぞれの都合のいいときにしか繋がってこなかった。そんなこれまでの現状であるが、それではもう持たなくなっている。国が言う「働き方改革」にはマスコミが伝えてくれない続きがあり、「働きがいのある学校を作れ」といわれている。これからの時代を生き残っていく子どもたちが成長を実感できる学校づくりをしていかなければいけない。それぞれの教育に重なる部分があるが、この重なり部分が大きいほど先生方が苦勞しなくても色々な力を借りながら学校が充実していく。それがコミュニティスクールであり、養父市が目指す姿である。法律では努力義務とされているが、全国の学校をコミュニティスクールにすることを目指している。養父市はいち早く取組を始めており、各学校に数名の学校運営委員がいる。その委員の方々は地域の代表として、校長先生と協力しながら学校づくりをしていく。すなわち、学校を核としたまちづくりをしていくということ。社会教育とは、法律で「学校教育課程以外の教育活動」と示されている。簡単に言えば、「つながる大人の学び」である。人口減少と同じように、大人の学びがどんどん減っていつている。公民館にはいくつもの教室があっただろうが、登録に来る若者よりも辞めていく大人の方が遥かに多いのが現状である。何十年後かには大人の学びは消えてしまうかもしれない。人間は、学びでつながることが一番つながりやすい。社会教育の意義とは、「大人の力を育て地域の活性化に生かす」こと。これは、人づくりであり絆づくりである。すなわち、「つながる大人の学びでまちを作れ」ということで、そのた

めに公民館で皆が集まって学んでいる。これが活かされているのだろうか。学校教育の意義とは、良い高校に行くためではなく、より良い社会を作ることである。子どもたちを学校教育によって、より良い社会の担い手を作るように言われている。この社会とは地域であり、養父市のことである。「Uターン人材の特徴」について、独立行政法人労働政策研究・研修機構がデータを出している。出身地に愛着が全くないものは地元に戻らないという結論は見えている。愛着を育てることは、先生の仕事ではない。子どもの愛着を育てるには、大人の背中しかない。頑張る大人、苦勞している大人、一緒に頑張ってくれたり励ましてくれたりした大人の背中に養父市の良さがあるのだろう。高校時代に地元の企業を知っていた人ほど、Uターン志望が多いというデータもある。養父市には仕事がないから地元に戻らないという考えはいけない。今はどこにいてもどんなことでもできる時代であり、私たちはコロナの時代にそれを体験している。学生時代に地元の企業を知ることは大切だろう。もう一つ、「起業する」という意識づけを育てる教育をすることを大切なのではないだろうか。「私は養父で事業を興すぞ」という子どもが増えれば、大きく変わってくる。コミュニティスクールとは地域に支えられ子どもたちと一緒に育てていくことで、この教育が人口減少の激しいまちに残された唯一のまちづくりだと考えている。

4 その他

・次回は令和7年11月28日(金)午後7時～

5 閉会

午後9時、中島副委員長により閉会。

中島副委員長…長時間に渡って、頭をひねりながら意見を出し合った。私たちは地域に愛着を持つ子どもたちを育てないといけないと肝に銘じて、次回の会議にも臨みたい。